

# 「子ども」をめぐる愛のゆくえ

加藤美帆

最近、家族をテーマにした映画やドラマが多い。それもかつてのホームドラマではなく、血縁はない親子や、LGBTのカップルと一緒に暮らす子どもなど、多様なつながりの家族を通じて「家族とは何か」を問いかけるものがいくつもある。社会的な弱さやいたみを抱えた人びとが、相互に支え合う関係を「家族」として築きながら、生き方を模索するプロセスは、現代の社会で普遍性のあるストーリーともいえる。一方でそれらを家族の物語としてみせる重要な要素になっているのが、子どもである。現代においては、制度や役割に依らない家族のつながりを表すのに、子どもが、要の一つになっているのである。

アリエスが近代の産物として示した「子ども」は、後期近代の今日、一層大きな役割を背負うようになっていく。厚生労働省による子どもをもつことについての世論調査では、「子どもがいると生活が楽しく豊かになる」「子どもを持つことが必要ではないだろうか」。

そしてここ数年の医療技術の進展は、出生前診断をより容易に利用できるテクノロジーにもしてきた。新型出生前診断の導入後、検査を受けた妊婦は二〇一三年の八千人から二〇一六年には一万四千人に拡大しており、そして陽性の検査結果がでた胎児の多くは、中絶が選択されているという（日本経済新聞二〇一七年七月一七日）。検査結果次第では、胎児の親たちには重い判断が迫られることになっているのである。国家が直接的に「子どもの質」に介入する優生政策とは異なり、産むか否かの選択を親たち自身につきつける今日の状況は、市野川ら（二〇〇〇）のいう「新しい優生学」ともいえる。それは、個人の自己決定というかたちをとって実践されるが、こうした自己決定の背後には、子どもをめぐる責任や負担を過度に親に負わせる社会がある。いずれにせよ極めて重い選択が親たちに委ねられる時代である。

そしてベック（二〇一四）の指摘するように、グローバル化した世界では、国境を越えた卵子提供や代理出産のほか、子育てを含む私的領域の労働力移動は様々なかたちで展開をしている。「子ども」をめぐる愛や欲望は、市場や

とは自然なことである」という意見が上位を占め、子どもに老後の世話を期待するといった声は、きわめて少ない（平成25年度厚生労働白書）。子どもが「幸福な家族」や「普通の家族」をシンボリックに表す傾向は、益々強まっているようである。こうした社会の声に応えるように注目されているのが、不妊治療や生殖補助医療である。少子化への危機意識に後押しされながら、子どもをもつことと医療技術の結びつきは強まっており、政策的な支持によるところも大きい。

ところで、こうした医療技術を利用する人びと（とりわけ女性）は、なぜ子どもが欲しいのか。柘植が不妊治療を受ける女性たちへのインタビューから浮かび上がったのは、「普通の家族」になりたいという感情と、周囲からの思いやりや優しさで示される期待のなかで、不妊治療から降りることができなくなっていく過程である（柘植、二〇一〇）。少子化への危機意識の高まりは、子どもが欲しいという気持ちの背景

社会的・経済的な力の差とも結びつきながら、拡大を続けているのである。

かとう・みほ 総合国際学研究院准教授 教育社会学・家族社会学

## 文献案内

柘植あづみ『生殖技術——不妊治療と再生医療は社会に何をもちたらずか』みすず書房、二〇一二年

ウルリッヒ・ベック、エリーザベト・ベック・クレーゲル『現代の「家族」のかたち』伊藤美登里訳、岩波書店、二〇一四年

米本昌平・松原洋子・榎島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会——生命科学の世紀はどこへ向かうのか』講談社現代新書、二〇〇〇年

